

令和元年6月27日現在

機関番号：14401

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2016～2018

課題番号：16K13243

研究課題名(和文) ライフコースの視点からみた日本語教師の成長とキャリア支援プログラムの開発

研究課題名(英文) Development of Career Support Program for Japanese Language Teachers and Their Growth from Life Course Perspective

研究代表者

義永 美央子 (Yoshinaga, Mioko)

大阪大学・国際教育交流センター・教授

研究者番号：80324838

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,500,000円

研究成果の概要(和文)：現職日本語教師を対象とした質問紙調査を実施し、日本語教師に求められる資質・能力・スキルに関する自己評価、および、教師としての成長の過程や成長を促す転機となった出来事、キャリア構築上の課題や支援ニーズ等について尋ねた。その結果、現職日本語教師は「知識」や「授業活動の実施」については自信があるが、「自覚と情熱」「受容力・柔軟性」といった態度的な側面や、わかりやすく話すためのことばのコントロールといったスキルの向上を自分の課題だと感じていること、そして、日本語教師の資質・能力に対する自己評価の構成概念は「教育実践能力・知識」「教室と社会をつなぐ力」「情熱と内省力」の3つであることが明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

日本国内での外国人受け入れ拡大に向けた法整備が進み、日本語教育の社会的意義や日本語教育者の資質・能力に関する議論が改めて活発になる中で、本研究の成果は日本語教育者の専門性およびそのキャリア支援のあり方に示唆を与えるものである。

また、本研究の成果は学会発表のみならず、一般書2冊(『日本語教育学の歩き方ー初学者のための研究ガイド』大阪大学出版会・『ことばで社会をつなぐ仕事ー日本語教育者のキャリア・ガイド』凡人社)としても公表されており、日本語教育学の知見や日本語教育者のキャリアの現状をアカデミズムのみならず社会に広く伝える点でも意義があると言える。

研究成果の概要(英文)：We conducted a questionnaire-based survey of Japanese language teachers to examine the aptitude, abilities, and skills required of Japanese language teachers; the process of growth for teachers and the defining moments that promoted their growth and supported their needs; and other issues pertaining to career building. The survey revealed that Japanese language teachers were confident about their “knowledge” and “performance of classroom activities,” but felt that they needed to improve skills such as speaking in an easily understandable way and improve attitudinal aspects such as “self-awareness and/or passion” and “receptivity and/or flexibility.” Furthermore, the survey revealed that the compositional concepts of the self-assessment of Japanese language teachers’ aptitude and abilities were “knowledge and/or abilities pertaining to educational practice,” “power to connect the classroom and society,” and “passion and introspective ability.”

研究分野：日本語教育学

キーワード：日本語教育者 ライフコース 教師の成長 キャリア支援

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

本研究プロジェクトの代表者および分担者は、本プロジェクトに先立つ研究(科研費基盤研究(C)(一般)「日本語教育学研究の体系化および方法論の確立」、課題番号25370589)の成果の一つとして、『日本語教育学の歩き方—初学者のための研究ガイド—』(大阪大学出版会、2014年)を出版した。この本は、これまで抽象的に論じられてきた「日本語教育学」の姿を日本語教育学会の学会誌『日本語教育』に発表された研究論文の分析から具体的に明らかにし、初学者が研究を進める際の一つのガイドラインを提示した。

『日本語教育学の歩き方』は特に研究を始めたばかりの学生や若手研究者、およびその指導にあたる大学教員から好評を博したが、読者との対話の中で、学生や若手研究者からは「日本語教師としてどのように歩いていけばよいか、キャリアプランの指針がほしい」、日本語教育関係者からは「優秀な日本語教師を確保したいが、なかなかみつからない」という声を複数聞くことがあった。日本語教育学専攻の学部・大学院が多数設置され、優秀な日本語教師候補者の数は増加しているにもかかわらず、雇用する側からみれば適任者がいない、というのはなぜなのか。

女性や非常勤講師の割合が高いという日本語教育現場の特徴を考えると、女性の場合は特に結婚・子育て・介護等のライフイベントと職業生活との両立が大きな課題となる一方、雇用の不安定さも絡み、意欲や能力があっても自立した専門家としてのキャリアの構築が困難なことが予測される。結婚・子育て・介護等の様々なライフイベントと両立させつつ、日本語教師を一生の仕事として続けていくためには、ワークライフバランスに配慮しながら日本語教師の成長を促すことができる環境を整備することが喫緊の課題である。

2. 研究の目的

本研究の第一の目的は、日本語教師の資質、すなわち教育観や専門的力量的形成・変容過程、および具体的な成長の転機を明らかにすることである。またその際に、ライフコースの視点を取り入れ、日本語教師の「専門性」と「人間性」の両面における成長に焦点を当てる。第二の目的は、日本語教育機関を対象に、日本語教師の採用方法、現職教員の研修の有無や方法、ワークライフバランス促進のための支援策等に関する調査を行い、日本語教育機関のキャリア支援システムの現状を明らかにすることである。さらに、これらの知見に基づき、教員養成や現職教員の研修に活用できるキャリア支援プログラムを開発する。

3. 研究の方法

日本語教師の成長とキャリア支援について検討するにあたり、まず、学校教師や看護師等、他の専門職における取り組みや研究も視野に入れ、広く情報収集を行い、研究計画の精緻化をはかった。その上で、日本語教育機関と現職日本語教員を対象に以下の調査を行った。

1) 日本語教育機関対象の調査

日本語教育機関の校長および教務担当教員を対象にインタビュー調査を実施し、日本語教師の採用方法、現職教員の研修の有無や方法、ワークライフバランス促進のための支援策等、日本語教師の成長やキャリア構築を支援するための方策について尋ねた。

2) 現職日本語教員対象の調査

現職日本語教員を対象にアンケート調査を実施し、教員としての成長の過程や成長を促す転機となった出来事、キャリア構築上の課題や支援ニーズ等について尋ねた。

4. 研究成果

第一に、日本語教育機関対象の調査では、多くの機関で学生数が急増し、教員については「超売り手市場」となっている一方で、学期や年度によって学生数に増減があり、またその増減の予測が困難で安定的な教員採用が難しい結果、多くの教師は非常勤講師として採用されていることが明らかになった。そして「日本語教師は食えない」「日本人なら誰でもできる仕事」といった一般的なイメージと待遇の悪さを、多くの関係者が関連させて語っている。また、全ての調査協力機関で専任教員は産休・育休および介護休暇を取得できるが、非常勤講師にはこのような制度的支援はなく、教師本人と職場の裁量の範囲で働き方を調整している。職についての研修では、常勤・非常勤の別なく参加できる研修を実施している機関が多いが、そのほとんどは日本語の教え方に関する研修であり、教師の成長や働き方、キャリア構築などに関する研修を実施している機関は少ない。優秀な教員を確保し教育の質を保証するためには、ワークライフバランスに配慮しながら教師としての成長を促すことができる環境を整備するとともに、日本語教員の専門性に関する社会的な認知を高めていくことが課題と言える。

第二に、現職日本語教員対象の調査では、現職日本語教師は「知識」や「授業活動の実施」については自信があるが、「自覚と情熱」「受容力・柔軟性」といった態度的な側面や、わかりやすく話すためのことばのコントロールといったスキルの向上を自分の課題だと感じていること、そして、日本語教師の資質・能力に対する自己評価の構成概念は「教育実践能力・知識」「教室と社会をつなぐ力」「情熱と内省力」の3つであることが明らかになった。また、「日本語教師としての成長に役立った経験」は、「高校までの経験」「養成講座・大学・大学院での学び」「教育実践の経験」「海外での生活や日本語教育経験、言語学習経験」「人との出会い」「日本語教育以外の職業経験、色々な人生経験」に整理することができた。

これらの研究成果を論文3本、学会発表2件として公表した他、日本語教員の養成や現職教員研修に活用できる図書（入門書）を2冊執筆・編集した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計3件）

義永美央子、自律学習支援のための日本語学習記録における教師コメントの分析、『大阪大学国際教育交流センター研究論集 多文化社会と留学生交流』22号、査読無、2018、pp.33-46

Yukiko Hatasa & Tomoko Watanabe, Japanese as a Second Language Assessment in Japan: Current Issues and Future Directions., *LANGUAGE ASSESSMENT QUARTERLY*, 14/3, 査読有, 2017, 192-212.

義永美央子、まなぶ・つなぐ・つくる ポスト・コミュニケーションアプローチの時代における教師の役割、『リテラシーズ』20号、招待・査読有、2017、pp.24-40

〔学会発表〕（計2件）

渡部倫子・義永美央子・本田弘之、ライフコースの視点からみた日本語教師の成長 アンケート調査の結果をもとに考える、日本語教育学会 2018 年度秋季大会・交流ひろば、2018 年 11 月 24 日、於プラサ・ヴェルデ、査読無

義永美央子・渡部倫子・本田弘之・岩田一成、言語教師の成長とその支援 日本語学校へのインタビュー調査から考える、言語文化教育研究会第3回年次大会・フォーラム発表、2017年2月25日、於関西学院大学、査読有

〔図書〕（計2件）

本田弘之・岩田一成・義永美央子・渡部倫子、大阪大学出版会、日本語教育学の歩き方 初学者のための研究ガイド・改訂版、2019、298

義永美央子・嶋津百代・櫻井千穂（編著）、凡人社、ことばで社会をつなぐ仕事 日本語教育者のキャリア・ガイド、2019、120

〔産業財産権〕

出願状況（計0件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年：
国内外の別：

取得状況（計0件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究分担者

研究分担者氏名：渡部倫子

ローマ字氏名：WATANABE, Tomoko

所属研究機関名：広島大学

部局名：教育学研究科

職名：准教授

研究者番号（8桁）：30379870

研究分担者氏名：本田弘之

ローマ字氏名：HONDA, Hiroyuki

所属研究機関名：北陸先端科学技術大学院大学

部局名：グローバルコミュニケーションセンター

職名：教授

研究者番号（8桁）：70286433

(2) 研究協力者

研究協力者氏名：岩田一成

ローマ字氏名：IWATA, Kazunari

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。